

緒方流

陶術秘法

上薬の法

- 一 (1) 唐土 百目
- 一 (2) 日野岡 式拾八目
- 一 (3) 白玉 拾八目

地薬の法

- 一 (4) 白絵土 百目
- 一 日野岡 六拾目
- 一 白玉 五拾目
- 一 唐土 八拾目

青薬の法

- 一 (5) 緑青 六分
- 一 唐土 七分
- 一 白玉 壹匁五分

黄薬の法

- 一 (6) 唐白目 壹分
- 一 唐土 壹匁五分
- 一 白玉 式匁五分
- 一 (7) 紅カラ 壹分

赤薬の法

- 一 (7) ヘンカラ 六分
- 一 (8) 黄土 拾目
- 一 唐土 五分
- 一 白玉 式目

白薬

右地薬を相用

黒薬の法

(9) 藍呉須 壹匁

一 唐土 三分

一 白玉 三分

(10) 白緑 貳分

紺青薬の法

(11) 花紺青 壹匁

一 唐土 五分五リン

一 白玉 壹匁

右の通掛合せ、水薬加え相用

唐土見様の事

一 色白くこまかく、よくかたまり

居候品相用

白玉見様の事

一 右同様、色白くこまかき品宜、

是は細末もの

但 白玉ばかり焼、白く上り候えば宜候、

且は、青味ある時は下品故、其

品用いず候事

白絵土製法の事

一 水干白絵土上品なる物の内に

て、色白くこまかき分撰、其分

水にて薄くとき、こまかき絹ぶる

にてこし、凡半日も置、よくお

どみ候処にて上水こぼし、同様

四五度もいたし、よく干上り候て、

底へ付居候荒き方取捨、上の

分ばかり相用

青緑製法の事

一 (13) 板流し奈良緑青拾目に水

五合入、海塩少し入よく煮立、

かき廻し、取のけさまし置、
おどみ候処にて上水こぼし、又
水を入同様煮立、もつとも二度
目より海塩は入れず、干上り砂のごとく
さらさら致候はば宜、上通りに皮
はり居候分は取捨候事

但 右製法は一体、緑青は塩気深く
含居品ゆえ、塩気御座候ては焼上り
色悪しく、右故塩抜製法致相用

唐白目製法

- 一 唐白目はかたまりの方宜、右を
荒こなし致、入鉢にて極細末
に粉摺いたし置相用
- 一 紅からは光明印相用
黄土はつづの方宜
- 但 色赤味御座候品は、焼上りにても
赤色宜、依て是を相用

藍呉須製法

- 一 藍呉須はきめよく光り有品
宜、右品を素焼の器に入れ
よく焼、水を器に入是へ取、夫
より入鉢にて細末に致置相用

白緑青製法

- 一 白緑、素焼の品に入よくやき、
黒く相成候を用

花紺青

- 一 花紺青、凶色中通りの色
合にて、包紙の表より指にて
押ししみ候手答の品多分
宜、右品は伝書の掛合せに寄らず、
焼上りにてこく黒ずむ時は
白玉を加へ、薄き時は白玉
をしかえ（ひかえ？）、紺青焼上り色合
一様に定め難し、委々焼上り色甲乙

御座候間、紺青御撰方第一
に御座候

右の品々、前書の通製法
致置、伝書の通掛合の事

水薬煮様事

- 一 布海苔五分に水二合入、よく
煮立、絹こしに致相用

右水薬加へ様の事

- 一 上薬は、水薬すくなき時は
筆廻り悪しく、むらこく相成、又
多き時は薬の乗り悪しく、
焼上り色宜しからず、筆廻り宜位
に水薬加へ相用

- 一 地薬は、水薬すくなき時は色
薬の筆廻り兼、又多き時は筆
廻り宜候えども、焼上りにてむけ

取れ候事御座候故、水菓の
加減は色菓にて致事

但 色菓の筆、素焼物に書程

の筆廻りに候えば、地菓の水菓宜候

一 黒菓は、水菓すくなき時は

筆廻り、次多き時は上菓むけ

落ち火間に相成、素焼物にて

為し(試し)書いたし、黒菓下によく

付残り、筆随分廻り候えば、右

にて相用

右三品は、委く水菓の加減

有り、此外は右に唯々成丈

水菓薄き方宜、多き時は

上菓の乗悪しく候事

薬用様の事

一 上菓は薄致二度ぬり候事

但 むら濃き処は、焼上り薄白

むら相見え候事

一 地薬も右同様二度ぬり、是は
むらの処は焼上りむけ落
候事

一 青薬薄きは色出ず、濃き
は黒ずむ、又にしむ事も御座候
一 黄薬は薄く用方宜、濃きは
泡立、又は艶出ざる事も御座候
一 赤薬濃きも宜、薄きは焼切
候事御座候

一 黒薬は随分濃き方宜、余り
濃く候えば上薬乗らず、焼上り
艶出ざる事御座候

前文色薬の程は、皆委々極
上品御撰御用、且又何に依らず
細末製法方の儀は、極念入
摺複（かさね）御用、摺加へざる時は、焼上り

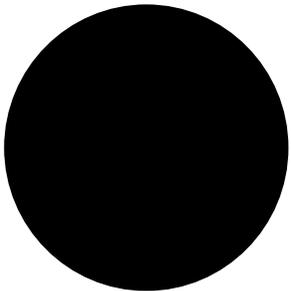
色合宜しからず候事

素焼火加減の事

一 内窯に入、始め火は人はだ位より
追々強く相成、器物薄黒く成切
候はば蓋を致し、上迄火をかけ、
次第に強くいたし、左の図の如く
に相成候はば宜しく

但 素焼通らざる品は、上菓本焼候節火替り

出来候事も御座候間、素焼候念入



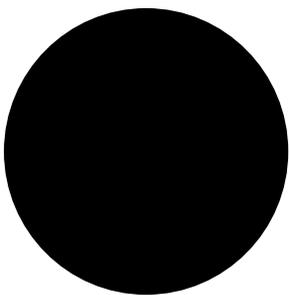
本焼の事

一 上菓掛り候器物、能く水気
をあぶり、夫より内窯に入、器物黄
色に成切候はば蓋をいたし、
右同様火をかけ、脇上下共火
むらなく致候事

但 火にむら御座候はば、内窯の器物

むらに葉解候間、是をよく氣
を付、左の円色のごとくに相成候
はば宜しく

色見の穴より
覗く事



右は小さき器物出来候法也

右乾山青緑焼秘法、並びに真
製上薬の義、此度貴殿
御執心に付伝受致候、もつとも宗元
秘法の書付を以、改正割印
請相渡候間、以来他見被
致間敷候、右の段如真文
相違有間敷候、猶又口決
伝授は追々御出情次第相
伝可申者也

嘉永元申年
四月

緒方流
陶工乾也
角印
花押

- (1) 唐土…とうのつち。鉛白。おしろい。塩基性炭酸鉛 $2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb(OH)}_2$
- (2) 日野岡…珪砂。 SiO_2
- (3) 白玉…白ガラス粉。白ビードロ。
- (4) 白絵土…化粧がけの白土。
- (5) 緑青…ろくしよう。塩基性炭酸銅 $\text{CuCO}_3 \cdot \text{Cu(OH)}_2$
- (6) 唐白目…とうしろめ。錫の酸化物。 SnO_2 。
- (7) 紅カラ、ヘンカラ…ベンガラ？酸化第二鉄 Fe_2O_3
- (8) 黄土…きつち。
- (9) 藍呉須…あいごす。唐呉須。酸化コバルトを主成分として鉄・マンガン・ニッケルなどを含む鉱物質顔料。
- (10) 白緑…岩緑青を砕いたものを水に溶かし、その上に浮遊したもの。
岩緑青は日本古来の天然顔料で、塩基性炭酸銅。マラカイト。
- (11) 花紺青…ヘルシヤ方面から中国へ渡来し、回青または回回青と呼ばれたコバルト顔料。
おどむ…澱む。沈んで底の方にたまる。
- (12) 奈良緑青…板流し緑青。真鍮や銅の削り粉を食塩水に漬けてよく攪拌し、緑の層が生じたとき水を流して上部の緑色の上澄液を分離し、よく水洗いして用いる。
- (13)